

魚河岸

芥川龍之介

青空文庫

去年の春の夜、——と云つてもまだ風の寒い、月の冴えた夜の九時ごろ、保吉は三人の友だちと、魚河岸の往来を歩いてきた。三人の友だちとは、俳人の露柴、洋画家の風中、蒔画師の如丹、——三人とも本名は明さないが、その道では知られた腕つ扱きである。殊に露柴は年かさでもあり、新傾向の俳人としては、夙に名を馳せた男だった。我々は皆酔っていた。もつとも風中と保吉とは下戸、如丹は名代の酒豪だったから、三人はふだんと変らなかつた。ただ露柴はどうかすると、足もとも少々あぶなかつた。我々は露柴を中にしながら、腥い月明りの吹かれる通りを、日本橋の方へ歩いて行つた。露柴は生つ粋の江戸つ児だった。曾祖父は蜀山や文晁と交遊の厚かつた人である。家も河岸の丸清と云えば、あの界限では知らぬものはない。それを露柴はずつと前から、家業はほとんど人任せにしたなり、自分は山谷の露路の奥に、句と書と篆刻とを楽しんでいた。だから露柴には我々にない、どこかいなせな風格があつた。下町気質よりは伝法な、山の手には勿論縁の遠い、——云わば河岸の鮪の鮓と、一味相通ずる何物かがあつた。……

露柴はさも邪魔そうに、時々外套の袖をはねながら、快活に我々と話し続けた。如丹

は静かに笑い笑い、話の相槌あいづちを打っていた。その内に我々はいつのまにか、河岸の取りへ来てしまった。このまま河岸を出抜けるのはみんな妙に物足りなかった。するとそこに洋食屋が一軒、片側かたがわを照らした月明りに白い暖簾のれんを垂らしていた。この店の噂は保吉さえも何度か聞かされた事があつた。「はいろいろか?」「はいっても好いな。」「——そんな事を云い合う内に、我々はもう風中を先に、狭い店の中へなだれこんでいた。

店の中には客が二人、細長い卓たくに向つていた。客の一人は河岸の若い衆、もう一人はどこかの職工らしかった。我々は二人ずつ向い合ひに、同じ卓に割りこませて貰つた。それから平たいら貝がのフライがを肴さかなに、ちびちび正宗まさむねを嘗め始めた。勿論下戸げこの風中や保吉は二つと猪口ちよくは重ねなかつた。その代り料理を平げさすと、二人とも中々なかなか健啖けんたんだつた。

この店は卓も腰掛けも、ニスを塗らない白木しろきだつた。おまけに店を囲う物は、江戸伝来の葎よしず簀すだつた。だから洋食は食つていても、ほとんど洋食屋とは思われなかつた。風中はあつちあつち誂あつちえたビフテキが来ると、これは切り味みじやないかと云つたりした。如丹はナイフの切れるのに、大いに敬意を表していた。保吉はまた電燈の明るいのがこう云う場所だけに難ありがた有たかつた。露柴も、——露柴は土地つ子だから、何も珍らしくはないらしかつた。が、鳥打帽とりうちぼうを阿弥陀あみだにしたまま、如丹と献酬けんしゅうを重ねては、不相変快活あいかわらずにしやべつてい

た。

するとその最中に、中折帽をかぶった客が一人、ぬつと暖簾をくぐつて来た。客は外套の毛皮の襟に肥った頬を埋めながら、見ると云うよりは、睨むように、狭い店の中へ眼をやった。それから一言の挨拶もせず、如丹と若い衆との間の席へ、大きい体を割りこませた。保吉はライスカレエを掬いながら、嫌な奴だなど思っていた。これが泉鏡花の小説だと、任侠欣ぶべき芸者か何かに、退治られる奴だがと思っていた。しかしまた現代の日本橋は、とうてい鏡花の小説のように、動きっこはないとも思っていない。

客は註文を通した後、横柄に煙草をふかし始めた。その姿は見れば見るほど、敵役の寸法に嵌っていた。脂ぎった赭ら顔は勿論、大島の羽織、認めになる指環、——ことごとく型を出でなかつた。保吉はいよいよ中てられたから、この客の存在を忘れたさに、隣にいる露柴へ話しかけた。が、露柴はうんとか、ええとか、好い加減な返事しかしてくれなかつた。のみならず彼も中てられたのか、電燈の光に背きながら、わざと烏打帽を目深にしていた。

保吉はやむを得ず風中や如丹と、食物の事などを話し合つた。しかし話はは

ずまなかつた。この肥ふとつた客の出現以来、我々三人の心もちに、妙な狂いの出来た事は、どうにも仕方のない事実だつた。

客は註文のフライが来ると、正宗まさむねの罎びんを取り上げた。そうして猪口ちよくへつごうとした。その時誰か横合いから、「幸こうさん」とはつきり呼んだものがあつた。客は明らかにびつくりした。しかもその驚いた顔は、声の主ぬしを見たと思うと、たちまち当惑とうわくの色に変わり出した。「やあ、こりや檀那だんなでしたか。」——客は中折帽を脱ぎながら、何度も声の主ぬしに御時儀ごぎをした。声の主は俳人の露柴るさい、河岸かしの丸清まるせいの檀那だんなだつた。

「しばらくだね。」——露柴は涼しい顔をしながら、猪口を口へ持つて行つた。その猪口が空になると、客は隙すかさず露柴の猪口へ客自身の罎びんの酒をついだ。それから側目はためには可笑おかしいほど、露柴の機嫌きげんを窺うかがい出した。……

鏡花きやうかの小説は死んではいない。少くとも東京の魚河岸には、未いまだにあの通りの事件も起るのである。

しかし洋食屋の外そとへ出た時、保吉の心は沈んでいた。保吉は勿論「幸さん」には、何の同情も持たなかつた。その上露柴の話によると、客は人格も悪いらしかつた。が、それにも関かからず妙ようきにはなれなかつた。保吉の書斎の机の上には、読みかけたロシユフウコ

才の語録がある。——保吉は月明りを履^ふみながら、いつかそんな事を考えていた。

(大正十一年七月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魚河岸

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>